

「日本河川・流域再生ネットワーク（JRRN）」は、河川再生について共に考え、次の行動へ後押しする未来志向の情報を交換・共有することを通じ、各地域に相応しい河川再生の技術や仕組みづくりの発展に寄与することを目的に活動する団体です。またアジア河川・流域再生ネットワーク(ARRN)の日本窓口として、日本の優れた知見をアジアに向け発信し、海外の素晴らしい取組みを国内に還元する役割を担います。(Since 2006)

目次	Pages
➤ JRRN 事務局からのお知らせ	1
➤ JRRN 会員寄稿記事	8
➤ 会員募集及び会員状況	10

JRRN 事務局からのお知らせ (1) JRRN Activity Report

小さな自然再生普及プロジェクトー「小さな自然再生」現地研修会（全3回）を開催しました

昨年に引き続きコロナ禍での開催となりましたが、11月に全3回（第12回～第14回）の「小さな自然再生」現地研修会を、公益財団法人河川財団の河川基金助成を受けて実施することができました。

本年も新型コロナウイルス感染防止の観点から、座学会場の定員を上限に従来の現地研修会より規模を縮小しての開催とはなりましたが、いずれも天候に恵まれ、座学とフィールドでの充実した研修会となりました。

各開催地の共催及び後援団体の関係者各位、各研修会で講師や技術指導を頂いた専門家及び「小さな自然再生」研究会の皆さま及び研修会参加者皆さまのおかげで、実に有意義な研修会となりましたことを御礼申し上げます。

各研修会の概要は次頁以降でご紹介させていただきます。また、当日の写真や講演資料を集約した開催報告書を今年度末までに作成し公開させていただきます。

(JRRN 事務局・和田彰)

【第12回「小さな自然再生」現地研修会～自然観察から都市河川でできることを考える～】

- ◆日時：2021年11月14日（日） ◆場所：東京都中野区・善福寺川 ◆参加人数：44名
- ◆主催：青少年育成鍋横地区委員会、「小さな自然再生」研究会、JRRN
- ◆後援：中野区

日頃は川との触れ合いが少ない地元の子どもたちを主役に、神田川の昔の様子や現在棲む生きものについて座学で学んだ後、秋晴れの中、水生生物の専門家や地元の大人たちとともに生きものの観察を行いました。



【第13回「小さな自然再生」現地研修会～河口部・内湖の保全と再生を考える～】

- ◆日時：2021年11月21日（日） ◆場所：滋賀県守山市・大川 ◆参加人数：34名
- ◆主催：淡海を守る釣り人の会、「小さな自然再生」研究会、JRRN
- ◆後援：滋賀県、守山市、（一財）セブン-イレブン記念財団

午前は「第5回滋賀セブンの森」に参加し湖岸清掃を通じて琵琶湖と内湖の関係性を学び、午後の座学では、大川及び新川河口部の内湖の価値について参加者で学び、生物多様性を高め、地域の賑わいの拠点としていくためのアイデアについて意見を交換しました。



【第14回「小さな自然再生」現地研修会～釧路川支川の魚類生息環境を再生する～】

- ◆日時：2021年11月28日（日） ◆場所：北海道釧路市・釧路川流域 ◆参加人数：42名
- ◆主催：釧路自然保護協会、「小さな自然再生」研究会、JRRN
- ◆後援：釧路市、釧路湿原自然再生協議会 河川環境再生小委員会

午前は、基調講演や事例紹介を通じて道東地域における自然再生に関わる取り組みや最新知見を学び、午後は釧路川支川における簡易魚道や産卵環境造成の実践を視察し技術を参加者で学びました。



JRRN 事務局からのお知らせ (2) JRRN Activity Report

小さな自然再生普及プロジェクトー「第 12 回現地研修会@東京都中野区・神田川流域善福寺川」開催報告

2021 年 11 月 14 日（日）、第 12 回「小さな自然再生」現地研修会を東京都中野区の神田川水系善福寺川にて開催しました。今回の「小さな自然再生」は、これまで 50 年近い間、安全上の理由から一般立ち入りをしていなかった都市河川で、地元小学生を対象とした自然観察会の開催でした。

発端は、主催の一人である小宮山さんが、御自身のお子さん達と川べりを歩き、都会の身近な川に、たくさんの魚を見つけたことでした。この水辺を子供たちに見せてあげたい、その熱意が今回の開催につながりました。主催は東京都中野区で活動する「青少年育成鍋横地区委員会」が行い、地元の「わくわく隊」メンバー（小学生 4 年生以上）とその保護者が参加の中心となりました。また、上流側で活動する市民団体「善福寺川を里川にカエル会」の方々にも参加いただき、総勢 44 名の参加者にお越しいただきました。

第一部の座学では、開会挨拶として、地元小学校の校長先生からのコメントを頂いた後、千代田町会長の関さんによる戦後の神田川、善福寺川の昔話がありました。昔は川で魚やエビを捕まえながら泳ぎ下って遊んだこと、当時あったパン工場のいい匂いにお腹を空かせていたことなど、とても楽しい話で、小学生たちも興味深く聞いていました。また、リバーフロント研究所からは、杉並区の調査報告書に基づき、善福寺川や神田川での魚類調査結果などの説明を行いました。子供達からは、善福寺川のエビは煎餅にして食べられるかなど、楽しい質問も寄せられました。



座学が終わると、保護者達のてきぱきとした段取りの元、子供達が隊列を組んで徒歩で現場まで移動しました。約 20 分の徒歩の後、現地に到着です。

第 2 部の自然観察会では、ヘルメットとライフジャケットを着用した参加者が、実際に川に入ってタモ網を手に取り水生生物採集を行いました。今回の取り組みで最もハードルの高い部分として、40 名以上の参加者による高さ約 4 m の掘り込み河道と道路上の安全なアクセスが挙げられましたが、安全帯を装

第 12 回「小さな自然再生」現地研修会 【プログラム】

12:30 - 13:30

〈第 1 部：神田川について学ぶ座学研修〉

開会挨拶（小宮山たかし：青少年育成鍋横地区委員会副委員長）

神田川の昔（関正行：千代田町会長）

神田川に暮らす生きものたち（白尾豪宏：公益財団法人リバーフロント研究所）

～善福寺川へ移動（徒歩）～

14:00～15:30

〈第 2 部：善福寺川での自然観察会〉

（現地指導：白尾豪宏（同上）、池田裕一（公益財団法人リバーフロント研究所）、岩瀬晴夫（株式会社北海道技術コンサルタント）、三橋弘宗（兵庫県立大学）

16:00 閉会

着し、一人ひとりの子供の下で主催者側の大人と一緒に梯子を上り下りすることで無事にクリアできました。

見学対象とした区間では、三面張り水路の拡幅区間でしたが、礫や砂が溜まっており、水草も生えていました。子供達は歓声を上げながら、素足を水に浸してエビやザリガニを捕まえていました。また、少ないながらもモツゴ、ヨシノボリの仲間が採捕され、身近な水辺に確かな命が息づいていることが実感できたと思います。兵庫県立大学の三橋先生からは、プラナリアの説明もあり、子供たちは興味深く耳を傾けていました。川から上がった子供達からは、楽しかった！との声が聴け、保護者も新鮮な体験ができたとのことでした。終了後の反省会では、魚が豊富な時期に開催を早め、水生生物の多様性を参加者が感じられるようにしたいと次回への意気込みが語られており、小さな自然再生への大きな足掛かりを皆で共感できました。



（JRRN 事務局・白尾豪宏）

JRRN 事務局からのお知らせ (3) JRRN Activity Report

小さな自然再生普及プロジェクトー「第 13 回現地研修会@滋賀県守山市・野洲川流域大川」開催報告

第 13 回は 2021 年 11 月 21 日（日）、滋賀県守山市の大川・新川での開催となりました。両河川とも、琵琶湖に注ぐ一級河川野洲川の旧河道跡で、河口部の一部が琵琶湖とつながる「内湖（ないこ）」と呼ばれる湖沼となっており、特徴的な自然環境が形成されています。今回は、「河口部・内湖の保全と再生を考える」というテーマで実施されました。

プロジェクトの発起人は「淡海（おうみ）を守る釣り人の会」という釣り人達の団体です。釣りの延長で琵琶湖の自然環境に関心をもち、セブン-イレブン記念財団の助成を受けながら、当該地を含む公園を「滋賀セブンの森」と定め、企業や行政と連携し湖岸清掃や小さな自然再生に取り組んでいます。今回は第 5 回の「滋賀セブンの森」活動とあわせて開催され、小さな自然再生チームとしては約 30 名が参加する会となりました。

今回は「滋賀セブンの森」活動とのコラボのため、まずは参加者全員で湖岸の清掃活動を行いながら現地視察を行いました。ビニール等のゴミだけでなく時にはパイプなどの大物を引き上げるなどして移動し、河口部で投網やガサガサで魚類や底生動物などの生物を確認するとともに接続部の水路を確認し、植生や保全生態学、河川工学の専門家と積極的に意見交換を行いました。途中、常に琵琶湖の波の音が耳から聞こえており、まさに「母なる琵琶湖」を感じながらの現地視察となりました。



午後は別会場に移動し座学研修ですが、昼食として用意された弁当が琵琶湖の恵みをふんだんに使った大変おいしいものであったことだけは、ここで触れておきたいと思います。

さて、座学研修ですが、宮本守山市長の挨拶ののち、京都先端科学大学の丹羽先生から「内湖周辺湿地の植生」ということで、現地の植生の特徴やエコトンの重要性について説明があったほか、琵琶湖湖岸よりも高い湿地ポテンシャルをもっていると想定されることなどの説明がありました。



次に、琵琶湖環境科学研究センターの佐藤先生より「内湖の機能・価値と再生の方策を考える」と題して、琵琶湖と比較

第 13 回「小さな自然再生」現地研修会 【プログラム】

09:00 - 12:50

〈第 1 部：「第 5 回滋賀セブンの森」参加、湖岸清掃をしながら新川河口部及び大川河口部の現地視察〉

（現地案内・指導：淡海を守る釣り人の会、丹羽英之（京都先端科学大学）、佐藤祐一（琵琶湖環境科学研究センター）、瀧健太郎（滋賀県立大学）、岩瀬晴夫（㈱北海道技術コンサルタント））

～座学会場移動&昼食～

14:00～16:30

〈第 2 部：大川河口部の湿地環境を学ぶ座学研修〉
挨拶（宮本和宏：守山市長／武田みゆき：淡海を守る釣り人の会副代表／土屋信行：JRRN 代表理事）

内湖周辺湿地の植生（丹羽英之：同上）

内湖の機能・価値と再生の方策を考える（佐藤祐一：同上）

意見交換会

しながら内湖の水質等の水環境や植物の生育環境としての特徴、魚類の生息環境としての重要性などを説明した上で、「内湖の価値の再発見し、その機能の再生を図っていくことが重要」との発表をされました。更に、滋賀県立大学の瀧先生の進行による意見交換会では、環境に関する個別の質疑の他、ゴールはどのように考えるかなど活動の方向性に関するやりとりもあり、活発な意見交換会となりました。

第 2 部の様子はグラレコでとてもわかりやすくまとめていただき、最後にみんなで共有しました。会の終了後もそれぞれの場所で立ち話が續くなど熱気が冷めやらぬ様子で、今回の現地研修会が、参加者にとって地域の自然環境の価値を再確認し、今後の取り組みに向けてよい機会となったことを実感しました。



(JRRN 事務局・阿部充)

第 13 回「小さな自然再生」現地研修会 in 滋賀県守山市 参加者からの声

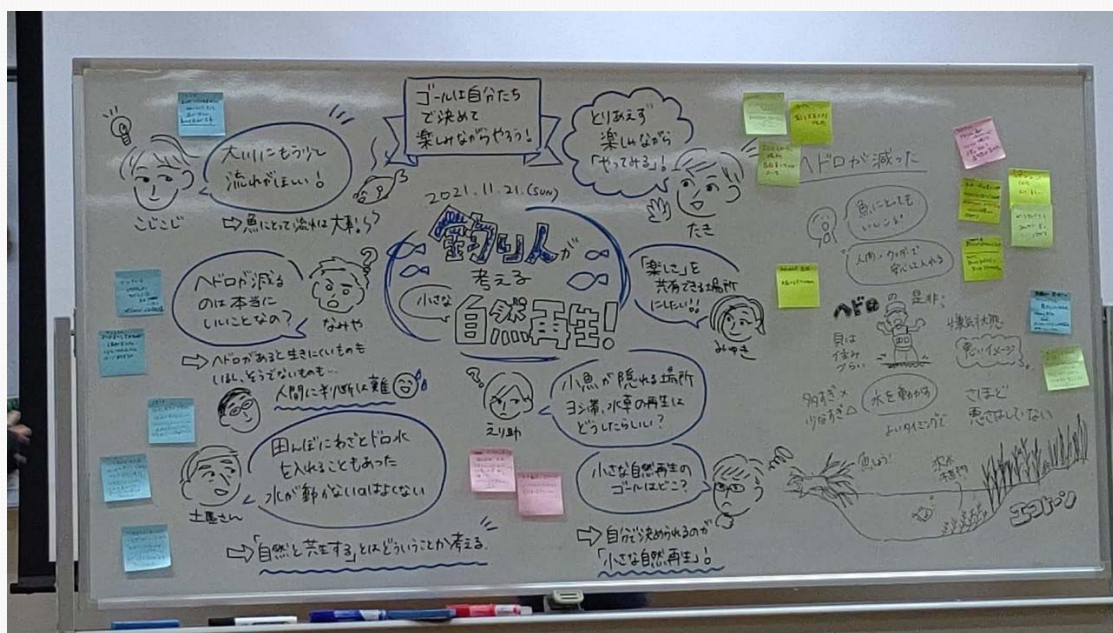
普段、魚を中心としたものの見方をしてしまう釣り人にとって、植物や河川工学的な視点からのご意見を戴けることは新鮮で面白く、貴重な機会となりました。有識者の皆さんが「この場所は面白いね」「ここはこうやったらどう？」といった意見を沢山下さったので、ずっと大川のポテンシャルを信じて活動している者として、非常に嬉しく、そして励みになるものでした。大川という琵琶湖でも稀有なフィールドが、琵琶湖を愛する全ての人にとって大切にワクワクする場所になるよう、育んでいきたいと思えます。（淡海を守る釣り人の会／神戸大）

久しぶりに小さな自然再生に参加でき、非常に楽しかったです。現場研修会で実際にやることの大切さと面白さを改めて知ることができました。講座では、大川の現状と自分なりの未来を想像できて貴重なお話を聞けて良かったと思います。僕はあの場所を子供達の勉強の場所と共に地域に愛され場にしたいと思いました。（淡海を守る釣り人の会／大阪産業大学）

2020 年 6 月から始めた小さな自然再生。琵琶湖と廃川になった大川河口の出入り口の木を切って流れを良くしただけの作業でした。少しの変化しか起こせていませんが内湖の湖底は砂利を感じることが出来るようになりました。ただ今後の展開は暗中模索。専門家の先生に現場を見ていただきたくさんの情報を与えていただき次の景色や方向性が見えました。研究者が持っている情報と釣り人たちが日々見ている水辺環境の変化を合わせるととてもいい成果が出る気がしています。これからもご指導お願いいたします。（淡海を守る釣り人の会）

僕は途中参加だったのですが、佐藤先生のお話聞いて感じたことは窒素とリンの関係性や水位など、いくつかの要因が複合的に重なりあっているため、一流の学者さんでも一言で琵琶湖の環境を語るのは非常に困難だということです。これを知れただけでも勉強になりました。また、魚や植物などの生物視点か人間視点かによっても良い水質の基準が異なるので、釣り人の会でもどこに GOAL を設定するか、みんなで議論してもいいと思いました。僕は何のために活動するのか、みんなで統一した目標を明確にした方がよいと思う派です！（淡海を守る釣り人の会）

今後、大川・新川がどのように生まれ変わっていくかワクワク感が残った勉強会であり、特に「できることから始めよう。目標はそれぞれ。」という言葉が心に響きました。琵琶湖の魚が減っている理由に内湖の消滅が挙げられましたが、今後小さな自然再生を通じて、守山湖岸が琵琶湖の再生モデルとして発信していける地になって欲しいと思いました。こんなに多くの各分野のプロ達が集まる、大変有意義な機会を作ってください本当にありがとうございました。（守山市環境政策課）



第 13 回「小さな自然再生」現地研修会 in 滋賀県守山市 参加者からの声

小さな自然再生勉強会で感じたこと

守山市民／寺谷公輔



なぜ内湖再生が重要なのかを理解できた

今回の勉強会を通じて武田さんが取組まれている大川の内湖再生の意味と背景を理解できた。胴長を履いて琵琶湖に入ったときに「以外と琵琶湖キレイやん」という感覚があったが、滋賀県琵琶湖環境科学センター 佐藤先生のスライドで水はキレイになっても魚（特に在来種）が減っている、その原因が人間の活動（埋め立てや水位操作）によって産卵場所を失ったことという事実を知り、その産卵場所として大川の内湖再生がモデルケースになり得るということを理解した。また、琵琶湖の生態系が人と自然の絶妙なバランスで成り立っていたこと、一度失ったバランスを琵琶湖で取り戻すのは不可能であり、内湖での小さな再生から取り組むのが現実的な路線であると知った。

京都先端科学大学 丹羽先生のお話で内湖は年月が経てば陸になる、維持していくには人為攪乱が必要で、大川の小さな自然再生には人為攪乱が起こせる釣り人の会、地形、湧き水、自治体協力と必要なリソースが整っていると感じた。地元に住む個人として参加したいし、会社も巻き込みたい。

パッションを持った自発的な人の集まり

武田さんと前川さんが着火して、琵琶湖の環境保全に共鳴しあったメンバー同士のディスカッションは次々とアイデアが出て、バンバン化学反応が起こっていた。自主的に集まり、それぞれが自分のやりたいことの延長線上で琵琶湖に関わっている。その羅針盤として MLG s があるという構図かなと勝手に解釈した。学生の方が質問された「この取組の“目的・ゴール”は？」の質問に対して、瀧先生がおっしゃった「自分で決めたら」が全て。自然が相手なので決まった答えなどない。その問題に挑むのを楽しめる人が集まっているように感じた。企業も数値目標だけを意識してもモチベーションは上がらない。私はコカ・コーラ ボトラーズジャパンという会社に勤務しており、会社は「すべての人にハッピーなひとときをお届けし、価値を創造する」というミッションを掲げている。それぞれのやりたいことの延長線上に「ハッピー」があるといいと感じた。

全ては繋がっている

今私の関心事は「環境」である。みらいもりやま 21 との地球市民の森の再生事業、琵琶湖の環境保全活動など、再生は地球市民の森と繋がっている。未来を良くしたいと思う人が繋がれば繋がるほど未来は明るい。SDGs のウエディングケーキの基礎、前提は「環境」なので未来を良くするための最重要課題なのは間違いない。そう信じて目の前の自分のやりたいことをやっていこうと思った。

JRRN 事務局からのお知らせ (4) JRRN Activity Report

小さな自然再生普及プロジェクトー「第 14 回現地研修会@北海道・釧路川流域」開催報告

2021 年 11 月 28 日(日)に第 14 回「小さな自然再生」現地研修会を北海道釧路市の釧路川流域で開催しました。

午前の座学研修は、釧路自然保護協会の創立 50 周年記念講演として開催し、釧路湿原自然再生協議会・中村太士会長の基調講演に続き、小さな自然再生の意義や道東地区での取組など計 7 題の話題を各専門家にご提供頂きました。

また、午後のフィールド実習では、自然再生事業地の手づくり魚道等を参加者で視察し、適用した工法や技術的な工夫等を川の中に入りながら学び合いました。

現地研修会が終わる頃には氷点下の気温となりましたが、参加者の熱気で寒さを感じることなく有意義な座学とフィールドでの研修となりました。

なお、本研修会の午前の座学研修については、収録した内容を編集後に、2022 年 1 月頃を目標にオンデマンド配信する予定です。配信予定が確定後、改めて皆様にご案内させていただきます。

**第 14 回「小さな自然再生」現地研修会
～釧路川支川の魚類生息環境を再生する～
【プログラム】**

9:30～12:00

釧路川支川や道東の魚類生息環境再生の取組を学ぶ座学研修

開会挨拶 (神田房行：釧路自然保護協会 会長)

これからの自然再生の目指すべき姿

(中村太士：北海道大学大学院農学研究院 教授)

小さな自然再生大きな役割

(三橋弘宗：兵庫県立人と自然の博物館)

シマフクロウ保護と河川環境の関わり

(竹中健：シマフクロウ環境研究会)

道東におけるシマフクロウ等希少鳥類の生息環境整備の取り組み

(北橋隆史：環境省釧路自然環境事務所)

美幌町で取り組む様々な魚道づくり

(町田善康：美幌博物館)

知床で鮭が自力で川をのぼれる環境を復活させたい!

(森高志：斜里町水産林務課)

午後の釧路川支川自然再生事業の概要紹介

(野本和宏：釧路市立博物館)

現地研修内容説明と工法説明

(岩瀬晴夫：株式会社北海道技術コンサルタント)

14:00～16:30

自然再生事業地の魚道等見学・現地研修

魚道工法、工夫した点など解説 (岩瀬晴夫：同上)

16:30 閉会



神田会長より開会挨拶



中村教授による基調講演



フィールド実習の様子

(JRRN 事務局・和田彰)

JRRN 事務局からのお知らせ (5) JRRN Activity Report

アジア河川・流域再生ネットワーク(ARRN)活動 – 「第 15 回 ARRN 運営会議」及び「第 17 回 ARRN 水辺・流域再生に関わる国際フォーラム」開催報告



2021 年 11 月 16 日（火）、アジア河川・流域再生ネットワーク(ARRN)の理事会に相当する「第 15 回 ARRN 運営会議」をオンライン開催し、日中韓の各 RRN メンバーが参加し、ARRN の組織体制、活動計画及びネットワーク拡大に向けた審議が行われました。

ARRN 組織体制では、アジアの国・地域の更なる参加を促進するための組織体制の変更、また会長及び事務局の任期をこれまでの 2 年から 3 年に延長する ARRN 規約変更の決議がなされました。また、オンライン会議の積極活用の提案がなされ、これまで一年に一回開催していた ARRN 運営会議に加え、3 か月毎に一度を目標に非公式の交流会議を設けることなどが決まりました。

また、ARRN 運営会議の後は、『第 17 回 ARRN 水辺・流域再生にかかわる国際フォーラム』を「中小河川流域の統合的管理」をテーマにオンライン開催しました。

日中韓の中小河川の川づくりに関わる情報交流を目的に、日本 JRRN、中国 CRRN、韓国 KRRN より各 4 題を発表し、日本からは地下水管理、水辺の賑わい創出、多自然川づくり、また川づくりへの市民参加についてこれまでの日本の取組を中心に紹介させて頂きました。



オンラインによる運営会議の様子

(JRRN 事務局・和田彰)

12 月



出典 : <https://rubese.net/gurucomi001/?id=213889>



あの日のあの川 リレー日記 ～第 59 話～



あの日のあの川
リレーDiary

みなさんはどこの川でどんなことをした記憶がありますか？幼少期や青春時代に体験した川での記憶を日記として掘り起こして語るコーナーです。リレー形式で毎回次の人にバトンをつなぎます。

第 59 話主人公 宇佐美将平

(筑波大学大学院 システム情報学研究科 構造エネルギー工学専攻 白川（直）研究室『川と人』ゼミ)

(□川ガール・■川系男子)

(出身地を流れる川：千葉県新川(印旛沼放水路))

「当たり前を疑う」

いつのこと？：小学生、現在

どこの川？：新川（印旛沼放水路）

皆さん、おはようございます、こんにちは、こんばんは。池田くんよりバトンを受け取りました、筑波大学白川研究室の宇佐美将平です。私の住んでいた地域には自然な河川がなく、幼少期や青春時代に川と直接触れ合ったことはあまりありません。そのため、このバトンを受け取ったときは正直書くことがないと思いました。しかし、地元の川、新川について調べてみると新たな発見があり、いい機会を与えていただけたなと思っています。少し趣旨がずれるかもしれませんが、かつての新川に対するイメージと、今回調べてみて変化したイメージを書かせてもらえたらと思います。

幼少期の私は、よく新川の河川敷で野球をしていました。毎週のように川の近くに行っていたわけですが、川のことは何も考えず、ひたすら野球に熱中していました。唯一、川とかかわる時があるとすれば、それはボールが川に入ってしまったときです。新川は流れが緩やかなので、長めの虫取り網を使ってなんとかとることができた時もありましたが、水面幅が100mほどで浅くもなく、川に入るのは無理なので、大半はボールがなくなっていました。ボールが川に入るのは、誰かが暴投（投げミス）をしたときやバッティングでファールを打った時で、そのたびに喧嘩になったものです。そんなわけで、新川はボールがなくなる原因となる厄介な存在、くらいに思っていたのです。

ここから、今回新川について調べた内容を書きます。新川は、別名「印旛沼放水路」と呼ばれ、その名の通り印旛沼（流域面積が琵琶湖や霞ヶ浦に次ぐ湖沼）の排水を目的として開削された放水路だそうです。今思えば、どこからどう見ても人工的な河川に見えますが、幼少期に触れ合った唯一の川ですから、これを自然の川と認識して長く生きてきました。もし幼少期に川遊びできるような自然な川と出会えていたら、もっと早く川に興味を持てたのにと、少し悔いが残ります。また、悔いが残るのはそれだけではありません。今回調べるまで、後述するように、新川が治水上大きな役割を果たしていること、新川には特殊な非常に面白い特徴があることも全く知りませんでした。

江戸時代に行われた利根川東遷事業によって利根川の下流となった印旛沼は、周辺に大きな水害をもたらすようになりました。その対策として何度も治水事業が行われては失敗に終わり、1969年によりやく完成したのが印旛沼放水路（新川・花見川）です。これによって印旛沼周辺の水害はなくなりましたが、多くの人々が江戸時代の工事に携わる中で死亡し、その人々の墓地が印旛沼流域の各所に存在するようです。これを知ると、新川の存在意義が強く伝わってきますよね。子供のころにこれを知ったらどう思っただろうなと考えると、間違いなく新川に対するイメージは変わっていただろうと思います。

また、新川には特殊な非常に面白い特徴がありました。それは流れが逆転する場合があることです。新川は基本、印旛沼に向かって非常に緩やかに流れます。しかし、洪水が起きて印旛沼が増水したときには、東京湾方面への流れを止めていた大和田排水機場が排水をはじめ、流れが東京湾方面へと変わる仕組みになっているそうです。子供のころにこれに気づいていたら、きっと友達に自慢気に話していたと思います。現在は洪水時のみでなく、水質悪化防止対策として年数十回程度、大和田排水機場から放流されているようなので、いずれその瞬間に立ち会いたいと思っています。

以上が調べた内容です。身近に存在する大事なことや面白いことに気がついていないことを改めて痛感しました。きっとそのようなことが他にもたくさんあると思います。これからは“当たり前を疑う”ということを意識して、身近に存在する大事なことや面白いことにできるだけ気がつけるように生きていきたいと思っています。リレー日記の趣旨と少しずれてしまいましたが、読んでいただいた皆様の地元の川に対する興味が、より大きくなるきっかけになることを期待して、まとめとさせていただきます。最後まで読んでいただきありがとうございました。

（次は三森彩音さんにバトンを託します）

JRRN 会員募集中 JRRN membership

■ JRRN の登録資格（団体・個人）

JRRN への登録は、団体・個人を問わず**無料**です。市民団体、行政機関、民間企業、研究者、個人等、所属団体や機関を問わず、河川再生に携わる皆様のご参加を歓迎いたします。

■ 会員の特典

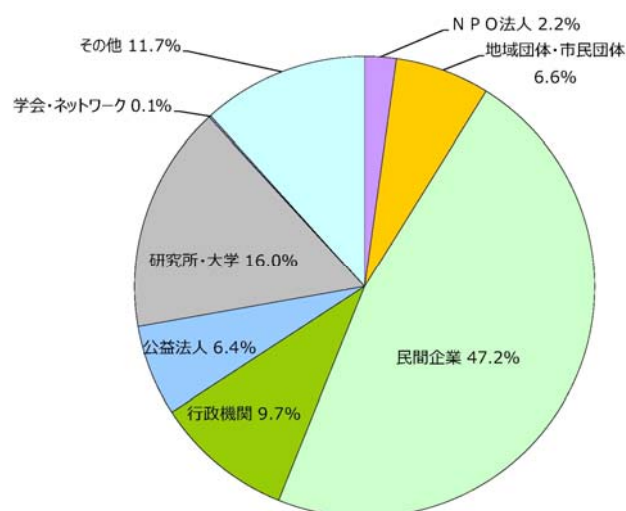
会員登録をされた方々へ様々な「会員特典」をご用意しています。

- (1) 国内外の河川再生に関するニュースを集約した「JRRN ニュースメール」が週 1 回メール配信されます。
- (2) 国内外のセミナー、ワークショップ等の開催情報が入手できます。また JRRN 主催行事に優先的に参加することが出来ます。
- (3) 必要に応じた国内外の河川再生事例等の情報収集の支援を受けられます。
- (4) JRRN を通じて、河川再生に関する技術情報やイベント開催案内等を国内外に発信できます。
- (5) 韓国、中国をはじめとする、ARRN 加盟国内の河川再生関連ネットワークと人的交流の橋渡しの支援を受けられます。

■ 会員登録方法

詳細はホームページをご覧ください。

<http://www.a-rr.net/jp/member/registration.html>



2021 年 11 月 30 日時点の個人会員の所属構成

(個人会員数：824 名、団体会員数：62 団体)

※11 月の新規入会数： 個人会員 1, 団体会員 0

JRRN 会員特典一覧表（団体会員・個人会員）

提供サービス	JRRN 個人会員	JRRN 団体会員	非会員 (一般)
1 ホームページへのアクセス及び記事へのコメント入力 ※1	◎	◎	◎
2 ホームページ「イベント情報」欄でのイベント掲載 ※2	◎	◎	◎
3 ニュースメール(週1回)の配信 ※3	◎	◎	×
4 Newsletter(毎月)及び年次報告書(年1回)等の発刊案内メールの配信 ※3	◎	◎	×
5 JRRN/ARRN主催行事の優先案内・優先参加 ※4	◎	◎	×
6 国内外の河川再生関連情報・技術収集や専門家・組織紹介の支援 ※5	◎	◎	×
7 ホームページ「会員からのお知らせ」内及びニュースメール「会員からのご案内」欄で団体が関わる行事・出版物・製品等の案内の掲載 ※6	△※7	◎	×
8 ホームページ「会員登録状況」「国内団体」内及び年次報告書内で団体名の掲載	×	◎	×
9 ARRN活動に関連する英語ニュース(ARRN Newsletter等)の不定期配信 ※8	×	◎	×
10 JRRN及びARRNが保有する国内外専門家・団体等との連携等の支援 ※9	×	◎	×

会員特典詳細はウェブサイト参照：<http://www.a-rr.net/jp/member/benefit.html>

【お気軽にお問い合わせください】

日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN) 事務局



〒104-0033 東京都中央区新川 1 丁目 17 番 24 号 NMF 茅場町ビル 7 階 (公財) リバーフロント研究所 内

Tel:03-6228-3865 Fax:03-3523-0640 E-mail: info@a-rr.net

URL: <http://www.a-rr.net/jp/> Facebook: <https://www.facebook.com/JapanRRN>